

「東京大学で見つかった田沢湖産クニマスの標本」

秋田県田沢湖に生息していた固有種クニマス(サケ科サケ属)は、1940年(昭和15年)に酸性水を玉川から導入したことにより絶滅した。その70年後、2010年(平成22年)秋に山梨県西湖にて生息が確認され、再発見のニュースは瞬く間に広がった。

1985年(昭和60年)、東京大学総合研究博物館の動物部門魚類コレクション(ZUMT)にて、雄雌2匹を写した1枚の紙焼き写真(図1)が発見された。刺し網漁によるヒメマスと考え保管されていたが、2011年11月、この写真が田中阿歌麿の『湖沼の研究』(1911)に掲載された「田澤湖の国鱒(上は雄、下は雌)」と一致することが判明した。すなわちこれはクニマスの最も古い写真であり、百年の時を経て由来が判明した貴重な資料である。

湖沼学の先駆者である田中阿歌麿は、東京帝国大学理学部動物学科の助手(当時)であり魚類学の草分けである田中茂穂と交流があった。『湖沼の研究』出版にあたり魚類に関する助言を得たと考えられ、この写真が田中茂穂の収集標本に端を発するZUMTに保管されていたことから彼の指導が及んでいたと推察される。

今年2月22日、「田沢湖 クニマス」と記された布タグ付きの雄の未登録標本が確認された。その網傷は先の写真の雄個体とよく一致した。さらに今年3月5日には、クニマスのタイプ標本を採集した動物学者で

ある岸田久吉より田中茂穂に贈られた1916年(大正5年)1月20日採集の雄雌2個体が発見された。雄の標本に「田沢湖クニマス 岸田久吉 寄贈」「写生四百七十二号」、雌(未成熟)には「口黒鱒雌」「田澤湖 大正五年一月二十日」「写生参考二百八十号」という布タグが付されていた。田沢湖産クニマスの既知標本は秋田大学、秋田県立博物館、田沢湖クニマス未来館、蓬萊館、京都大学、フィールド自然史博物館(米国)、カリフォルニア科学アカデミー(米国)に計17個体現存するが、当館の雄2、未成熟雌1を加えることで、総計20個体となった。これらのうち、ZUMT 67107は1909年8月に採集されており、夏産卵を示す貴重な標本かつ採集日が明確な最も古い標本である。ZUMT 69869, 69870は採集日が不明である本種のタイプ標本がいつ得られたかを推察できる標本であり、後者は、「口黒鱒」が未成熟期のクニマスであることを裏付ける重要な標本でもある。

これらの標本は、8月1日まで東京大学総合研究博物館にて展示される。明治から現在まで収集されつづけた魚類標本群には、先人の尽力が偲ばれ、整理には多大な時間と労力が要されるが、ご支援をいただいた皆様の協力により貴重な成果が得られた。ここに深く感謝申し上げる。

〔藍澤正宏・和田英敏 作成(原文 中坊徹次)〕

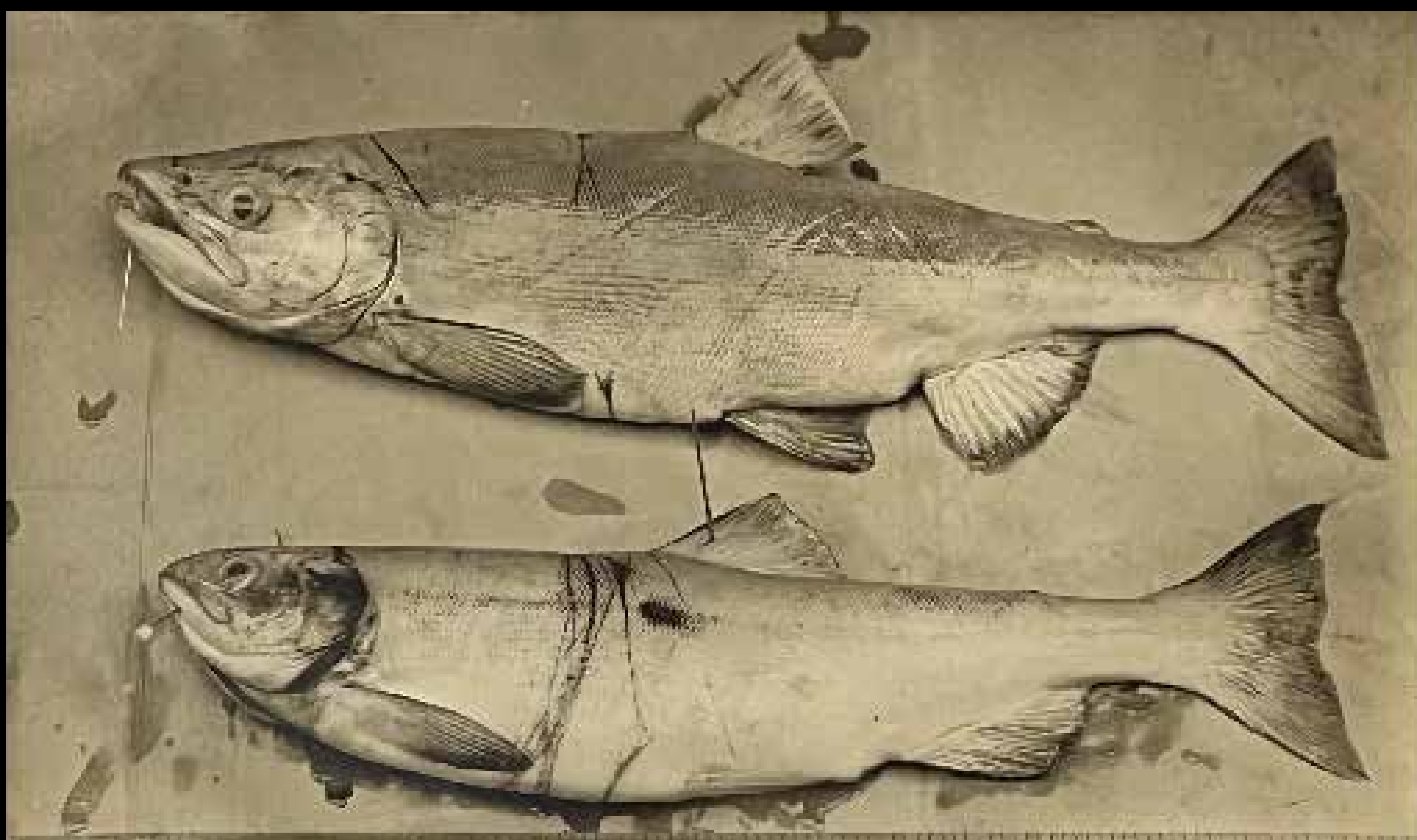


図1. 「湖沼の研究」に掲載されたクニマスの写真：上は雄、下は雌(本館所蔵)

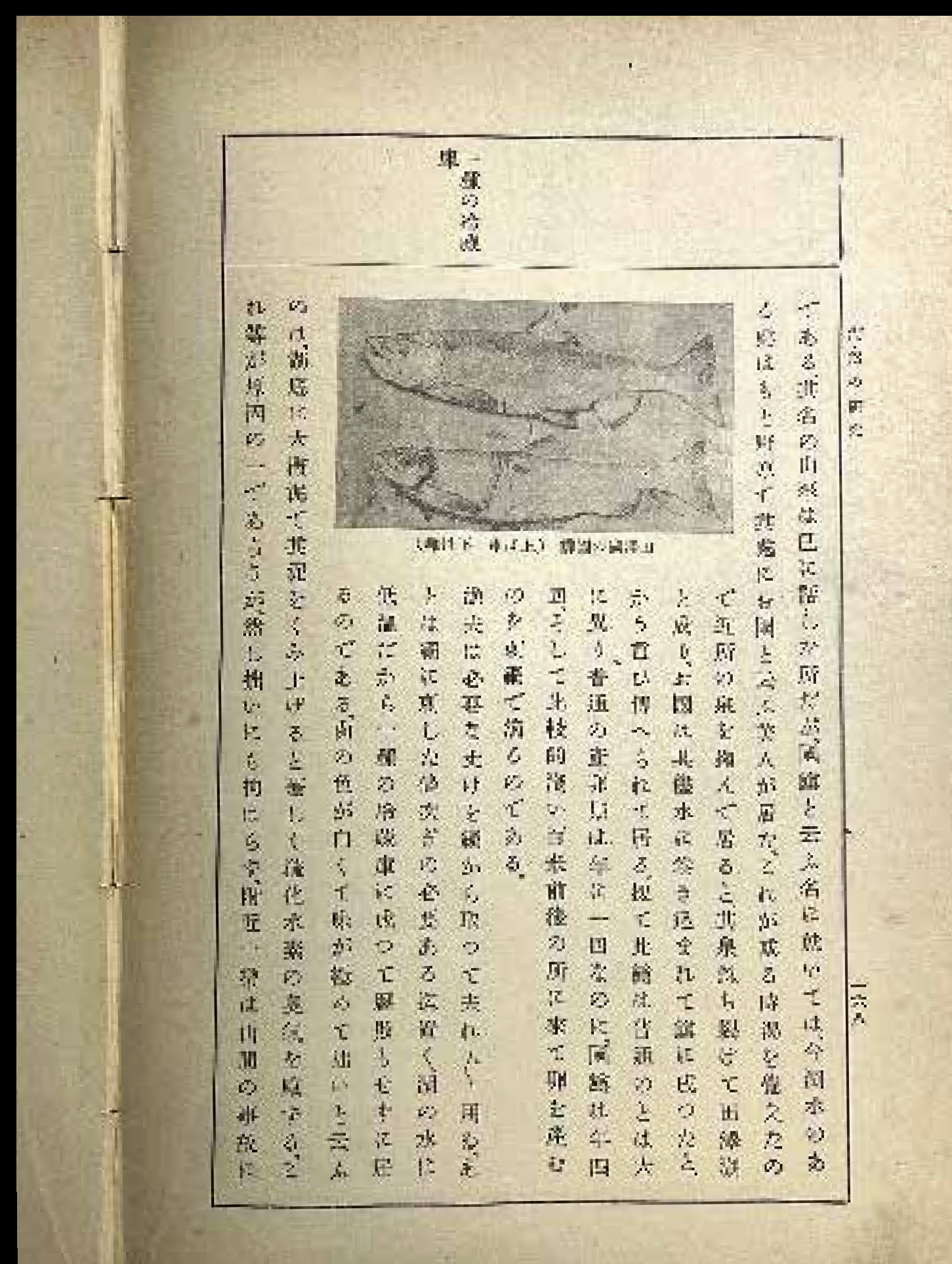


図2. 「湖沼の研究」のクニマス
掲載ページp.168
(原本：中坊徹次氏 所蔵)